

本人が特に手術を希望しない限り、外来での定期検査と経過観察を継続する。

2. 内科的治療の限界と他科へのコンサルテーション

手術適応と考えられれば専門医(外科医)に紹介する。部位診断や、腺腫と過形成の鑑別などは外科医に任せる。

文献

- 1) 石田常博・他：上皮小体腫瘍の全国集計(1980～1989年度症例)。内分泌外科 8：37, 1991
- 2) Potts JT (ed)：Proceedings of the NIH Consensus Development Conference on Diagnosis and Management of Asymptomatic Primary Hyperparathyroidism. J Bone Miner Res 6 (suppl 2)：1991

書評

永田 和宏・長野 敬・宮坂 信之・宮坂 昌之 編

分子生物学・免疫学キーワード辞典

柏崎 禎夫(東京女子医科大学膠原病リウマチ痛風センター)

当然のことながら、言葉が通じなければコミュニケーションは成立しない。論文を読んでも講演を聞いても、ほんのわずかばかりの術語が理解できなかったばかりに、内容がいまひとつ納得がいかないような、あるいは何となく未消化に終わってしまったような無念さを味わった経験は、どなたにでも大なり小なりあるのではなからうか。こういう場合に活用されるのが各種の用語辞典である。

医学関係の用語辞典もいままでに多種類のものが出版されてきた。しかし、従来の辞典で収録されている用語は、通常その概念が定着し、一般化されているものに限定されていることが多い。したがって、新しい用語や概念を調べるには不向きである。しかも、一つの利用語を解説するのに使われる字数に制限があるためか、解説の仕方に軽重がなされておらず、用語の由来・成り立ちはもちろんのこと、用語間の関連性や実験の原理・技法の詳細までも知ろうとするには多くの場合、無理である。

さて、近年の免疫学、分子生物学の領域の進歩は著しく、次から次へと新しい知見が発表され、新しい概念・術語が誕生し、その数は膨大にのぼる。臨床医学に身を置いている者にとっては、それぞれの術語を理解するのにそれこそ四苦八苦し、覚えるのにも汲々としているのが実情である。基礎的研究者でも分野が少しでも異なれば、恐らく同様ではなからうか。

こういう時期に「分子生物学・免疫学キーワード辞典」が発刊されたのは極めて時宜を得たものであ

る、と言わずして何と呼ぶべきであろうか。まさに私どもが長らく待望していた辞典であるといっても過言ではあるまい。本書は分子生物学・免疫学を理解するために必須と思われるキーワード約1,600語を収録し、その語義を正確かつ簡潔に解説しており、論文を読む際にしばしば立ち往生していた事態を解消してくれる分子生物学・免疫学の解説書でもある。

本書での類書にみられない特徴をいくつか挙げてみよう。

1) 最新の用語については、馴染みが得られるようにその名の由来・成り立ちや呼び名の説明がなされている。

2) 広く用いられている実験の原理・技法・装置などの説明のみならず、その手順にも解説が加えられている。

3) 図表を多用して理解を容易にさせてある。接着分子、オンコジーン、インターロイキンやCD分類などについては、その全体を関係づけて把握できるような工夫がなされている。

どこの家庭でも国語辞典の1つや2つは備わっているように、すべての医家に本書を必携の書として推薦したい。もちろん、医学生にとっても大いに役立つ。最後に、本書の性格上、完結ということはありません。定期的な改訂して新しいキーワードを追加し、up-to-dateな辞典としての装いを常に備えておいていただきたいことを要望したい。

(A5判 528頁 7,725円(税込) 1994年 医学書院刊)